

第 66 回全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会報告

研究部 沼 畑 早 苗

1. はじめに

2025 年度の全国国立大学附属学校連盟高等学校部会研究大会は、神戸大学附属中等教育学校が会場校となり、10 月 10 日（金）に、下記の時程で開催された。

今年度は会場校の都合により、従来の 2 日間開催から 1 日開催へと形態が変更されたが、「理科」「保健体育科」「家庭科」「学校図書館」「生活指導」「附属のあり方」の 6 分科会が設置された。各分科会では日頃の研究成果や喫緊の課題について活発な議論が交わされ、非常に有意義な情報共有の場となった。

2. 実施概要

開催日：2025 年 10 月 10 日（金）

会 場：神戸大学附属中等教育学校

2.1. 当日の時程

9:40	10:10	10:30	12:20	13:10	16:30
受付	全体会	分科会 1	昼食	分科会 2	

2.2. 本校からの発表概要

本校からは以下の分科会にて 3 名が実践報告を行った（各発表の詳細については次ページ以降を参照）。

(1) 理科分科会

「“ミニ課題研究”を通して科学的探究のプロセスを学ぶ授業実践」（発表者：山本 夏菜子）

(2) 家庭科分科会

「高校家庭科における外部連携を活用したソーシャルな学習デザイン」（発表者：葭内 ありさ）

(3) 生活指導分科会

「本校の部活動の現況と課題」（発表者：十九浦 美里）

3. おわりに

2025 年度全国国立大学附属学校連盟高等学校部会研究大会を恒例の 2 日間開催から 1 日開催へ変更することに関しては、さまざまな議論がありながらも、最終的には会場校に委ねるという形で今回の開催に至った。大きな変更点としては、全体講演がなくなったことがある。

2026 年度は、筑波大学附属高等学校が会場校となるが、1 日開催が踏襲される予定である。

“ミニ課題研究”を通して科学的探究のプロセスを学ぶ授業実践

理科（化学） 山 本 夏 菜 子

1. はじめに

本校は、2019 年度にスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）の指定を受け、2025 年度は第Ⅱ期の 2 年目にあたる。教育目標の一つである教養教育を土台とした「科学の力で未来を共創する女性リーダー育成カリキュラムの実践」を研究開発課題として、全校生徒（約 360 名）を対象に SSH の取り組みを実施している。SSH の活動の大きな柱になっているのが「課題研究」であり、本校では 1 年次必修「課題研究入門（1 単位）」・「課題研究Ⅰ（2 単位）」、2 年次必修「課題研究Ⅱ（3 単位）」、3 年次選択「課題研究Ⅲ（1 単位）」の 4 つの科目を設けている。今回は、1 年次「課題研究Ⅰ」の授業概要と、その中で実施している“ミニ課題研究”について実践報告した。

2. 「課題研究Ⅰ」の概要

この科目は、SSH 第Ⅰ期（2019～2023 年度）における学校設定科目「課題研究基礎」を改良・発展させたもので、理科・数学・情報の教科横断的な科目として開設している。データの取り扱いや文献調査の方法、プレゼンテーションのスキル等、科学的探究力の礎となる知識・技能を体験的に学習する授業を、理科（物理・化学・生物）と情報の 4 科目の教員（計 4 名）が協働して行っている。2 年次には「課題研究Ⅱ」において、生徒全員がそれぞれ決めたテーマについて 1 年間を通して探究活動を行うため、そこで必要となる知識や技能を 1 年次に習得することが最大の目的である。授業は、週に 1 回、2 時間連続で 1 学年全員を同じ授業時間に配置し、主に 1 学期は学年全体での講義形式、2 学期はクラス単位での実験・実習を中心に取り入れている。3 学期には、数学科教員も加わり、全授業時間を使って、後述する“ミニ課題研究”を実施している。

3. “ミニ課題研究”の実践紹介

生徒が科学的探究を自身の力で主体的に進めていくことができるようになるためには、「課題の設定→検証方法の立案→観察・実験→結果の処理→分析・考察→発表」という一連の科学的探究のプロセスを理解することが重要である。そこで本科目においては、その一連のプロセスを体験する機会を各学期に 1 回、難易度や生徒の自由度が段階的に上がっていくように設定しており、その最終段階として 3 学期の全授業時間（約 16 時間）を使って“ミニ課題研究”を実施している。生徒の希望に沿って「物理・地学」、「化学」、「生物」、「情報・数学」の 4 つの分野に分かれ、3～5 名のグループを編成して探究活動を行っている。

この“ミニ課題研究”の大きな特徴は、分野ごとに教員から題材や手法を限定するようなテーマの大枠を与えていることである。例えば、化学分野では、「中和滴定か酸化還元滴定を用いること」と手法のみを指定し、生徒自身で対象物質を決めてテーマを設定していく。このように、大枠を提示することで、テーマ設定の方向性は教員側で設定しつつ、生徒の自由度も担保することができる。探究プロセスの最初にして最大の難関と言える「課題の設定」を、ハードルを下げた状態で体験・トレーニングする機会としている。

また、2024 年度からは新たな取り組みとして、グループで作成したポスターを使って生徒一人一人が発表動画を撮影し、その動画をもとに教員が生徒個人の発表スキルの評価を行った。これにより、これまでグループ活動では難しかった個人へのフィードバックが可能となった。

今後の検討課題として、各個人の発表スキルだけではなく、他者の発表に対して質問や意見を述べ、生徒同士が切磋琢磨して研究の質を向上させる力の育成を目指したい。

高校家庭科における外部連携を活用したソーシャルな学習デザイン

家庭科 葭内 ありさ

2025 年度の第 66 回全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会家庭科部会では、本校の家庭科にて 2016 年度より継続しているアフリカ支援のエシカルブランドとの連携プロジェクトを中心に発表したほか、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）における家庭科の取組や、家庭科と STEAMS 教育の関係について取り上げた。

1. はじめに

2025 年度の全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会家庭科部会にて、「高校家庭科における外部連携を活用したソーシャルな学習デザイン」のタイトルで研究発表を行った。本校の家庭科および SSH（スーパーサイエンスハイスクール）概要を紹介し、SSH 学校設定科目 1 年家庭科必修「生活の科学」および家庭科と「STEAMS」教育の概要を題材として示し、質疑応答を行った。

2. 概要

本会では、本校の家庭科の概要を紹介しながら、家庭総合における、2016 年度より継続するアフリカ支援のエシカルアパレルブランドと連携したソーシャルなプロジェクトとその効果を中心に紹介した。プロジェクトでは、1 年生の家庭科で全生徒が考案した商品プロトタイプ 120 個より数点が選ばれた。それらを、アフリカ・ガーナに送り、貧困層の女性や障がい者の雇用を生むブランドの自社工場で生産し、東京のブランドのポップアップショップや直営店で販売した。さらに売り上げの 10%をアフリカの教育支援として寄付している。これらの一連のサステナブルなサプライチェーンを高校生が体験しながら考える、パフォーマンス課題のプロジェクトである。授業で行う商品販売準備やアフリカ工場スタッフとのコミュニケーション、10 年継続したプロジェクト、授業における工夫や改良点、生徒の成果物の分析による効果検証、2025 年度の最新プロジェクト等を発表した。また、前回の本会（2022 年 10 月）で示した SSH I 期（2019～2023）における家庭科 1 年必修科目「生活の科学」の 2023 年度以降の成果等の概要、2024 年度以降の SSH II 期における家庭科および家庭科と STEAMS 教育の関係を挙げた。なお、STEAM 教育にサステナブルの「S」を加えての葭内による提案が「STEAMS」教育である（YOSHIUCHI, 2023）。

特に具体的に紹介した 2025 年度までのエシカルブランドとのプロジェクトのうち、2022 年度までの内容は、2022 年度の日本教育学会にて発表済みである（葭内, 2022b）。また、家庭科と STEAM 教育の関係を整理したものを日本家庭科教育学会誌に掲載済（葭内, 2022a）であり、いずれも再構成したものを博士学位論文（葭内, 2023）の一部とした。詳細は以下の参考文献を参照されたい。

3. おわりに

久々の対面開催となり、各校では教員の入れ替えも多く、新たなメンバーでの交流を行った。参加各校の研究発表や質疑応答が行われ、新たな知見を得て、有益な研究交流の機会となった。幹事校の神戸大学附属高等学校をはじめ、ご参加の各校の先生方に感謝申し上げる。

参考文献

葭内ありさ (2022a) 「スーパーサイエンスハイスクールの家庭科における STEAM 教育—でんぷんの糊化から見つめるミクロな世界—」『家庭科教育学会誌』 65 巻 1 号 pp.33-38

葭内ありさ (2022b) 「SDGs 教育のためのエシカルブランドと連携した商品開発の試み—高等学校家庭科で育むアフリカへのまなざし—」 日本教育学会第 81 回大会（オンライン開催） 2022 年 8 月 24 日『日本教育学会第 81 回大会発表要旨集』 pp.148-149

YOSHIUCHI, Arisa, 2023, From STEAM to STEAMS Education: Cross-Disciplinary and External Collaborations to Teach Sustainability 2023 年 11 月 22 日 シンガポール教育学会・世界教育学会共催 2023 年度大会 (Nanyang Technological University 南洋理工大学, シンガポール) ERAS Conference & WERA Focal Meeting 2023 Programme Booklet. p.228

生活指導分科会発表報告:本校の部活動の現況と課題

指導部 十 九 浦 美 里

1. はじめに

本校は2014年度からSGH, 2019年度からSSHの指定を受け、教員、生徒をとりまく状況も大きく変化してきている。さらに部活動については、「教員の働き方改革」の推進や「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」の公表、さらに新型コロナ感染対策による活動制限もあり、活動の様子も変化してきた。今回は、この10年で整備されてきた部活動に関わる規定（内規）や生徒の活動の状況を報告し、今後の部活動のあり方について考える機会とした。

2. 本校の部活動の現況

今年度、本校では運動部が6団体、文化部12団体、同好会4団体が活動している。2021年度に陸上競技部と軟式テニス部が廃部になり、囲碁・将棋・かるた同好会が競技かるた部に昇格して以降、変更がない。これ以降も毎年のように同好会を新設したいという希望はでていたが、執行部会を通っても教員会議では認められず新設には至らなかった。理由は様々あるが、大きな理由としては顧問配置や活動場所の観点から全体数を増やすことが難しいということがある。また、同好会成立審議については「継続」と「新規」を合わせて審議しているが、現実として継続同好会が優先されてしまっている現状がある。この新規同好会が立ち上がりにくいことについては、自治会執行部も問題と感じており、同好会成立の審議のあり方について見直しを試みる動きが生徒の中で起きはじめている。一方、部活動に関しては、廃部にするということが非常に難しいため、そのしわ寄せとして新規同好会が立ち上がりにくくなっているということも大いにあるので、様々な問題が絡み合っていると感じる。

また、「教員の働き方改革」に関わる動きとしては、新型コロナ感染予防による活動制限がある期間は別のルールがあったが、現在は2017年度に生徒・教員にとって持続可能な部活運営を目指した部活動に関わる規定（内規）が運用されている。

3. おわりに

学校評価アンケートの部活動に対する回答をみると、生徒の部活動に対する満足度は低くない。しかし、教員・生徒の日々の忙しさや部活動に対する優先順位の差などから生まれるちょっとした問題は日々起こっており、部活動を学校の中でどのように位置づけていくのかは課題となるであろう。